修士論文
2020 年 1 月

成人用主体性尺度作成の試み
－主体性構成概念に関する質的調査－

指導　石川　利江　教授

心理学研究科
健康心理専攻
218J4054
顧　文洋

Master's Thesis
January 2020

Developing an Independence Scale for Adults:
A Qualitative Survey of the Concept of Independence

Wenyang Gu
218J4054
Master's Program in Health Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Rie Ishikawa

目次

1. はじめに 1
2. 主体性とは 3
3. 先行研究のレビュー 5
4. 主体性に関する質的調査 23
4.1 問題と目的 23
4.2 方法 23
4.3 結果 24
4.4 考察 28
5. 主体性の定義の改めと項目の選別 30
6. 総合考察 34

引用文献

1. はじめに

本論文においては，仕事または作業の場面で「主体性」の定義を改め，正確に測定するための尺度の開発を目的とした。主体性が心理学においてはとても複雑な概念で，また複数な主体性を測定する尺度があり，尺度作りの視点により違いがある。他の主体尺度また研究のレビューを加え，「主体性」の定義を明白し，特に２０代の若者を中心にどのように捉えるか，どのようにとりあげられているかを調査し，「主体性」の概念について考察を行うことを最初的な目的として，またその定義の内容について項目を収集し選定することにより，仕事または作業の場面での「主体性」尺度を作りすることを目的とする。

2. 主体性とは

主体性という日本語の辞書「大辞林　第三版」（2008，物書堂）によると，意味は「自分の意志・判断によって，自ら責任をもって行動する態度や性質。」であり，使いの例としては「～を持って行動する。」と説明されている。主体性は日本独有の単語として使われており，人材業界や産業経営領域で人の特性や能力を表現する場合はよく使われている。

3. 先行研究のレビュー

これまで心理学における主体性に関する研究は主に臨床場面，発達，教育などの分野で行われてきた，教育と臨床場面の対象者は子どもや生徒を主にして，「子供の主体性」という言葉が頻繁に用いられてきた（田畑，2016）。浅海（1997）は，主体性を「周囲の人の言動や自己の中の義務感にとらわれず，行為の主体である我として自己の純粋な自由な立場において自分で選択した方向へ動き，自己の立場において選択し，考え，感じ，経験すること。」として定義し，子ども用主体性尺度（1999）を開発した。

今回のレビューは子どもではなく成人の主体性を中心にするため，エリクソンの主体性発達段階による青年期における自我意識・社会的意識に伴い，主体性の認識も変化すると考えられる。先行研究を踏まえ，主体性の定義を検討し，日本の心理学関連論文雑誌において，主体性を扱った研究，または主体性を測定する尺度に関する論文をレビューすることとした。対象者は子どもと病気を持つ患者を除いた大学生と勤労者など成人を研究対象とする論文に絞った。

最後に対象として抽出されたのは以下の１６本論文であった，発表年順の順番で記述した。

4. 主体性に関する質的調査

調査方法

調査対象：日本のＡ大学に在籍する１８～２５歳の男女大学生 115 名。

調査方法：質問紙法

調査内容：

①「主体性という言葉から思い浮かぶことまだイメージはどんなものか」，②「仕事などで主体性がある人とはどのような人だと思うか」という二つの質問について自由記述で回答する形式とした。

結果

(1) 結果の分析手順

回収した質問紙の結果の処理方法は以下の手順で行った。

①質問紙の回答を「主体性のイメージ」と「仕事場における主体性」を分け別々パソコンに入力し，各回答を同じ大きさで印刷して項目として用意した。

②心理学専攻の院生４名（その中仕事経験ありのは３名）と心理学教授１名より心理学研究のゼミでブレーンストーミングを行い，カテゴライズ法も用いて手順①で用意した項目を分類と判定を行う。

③判定の結果の各カテゴリーを命名し，また代表的な回答を項目として抽出して主体性尺度の項目参考として整理すること。

自由記述の結果は複数な描写があることから，手順②には複雑な一つの項目を複数の簡単な描写の項目に分解することにした（一人の回答が複数件になる場合がある，割合を計算するには回答件数/総人数%となる）。手順③には「主体性のイメージ」と「仕事場における主体性」の代表的な回答を表にして以下になる。

(2) 主体性のイメージについて

「主体性のイメージ」部分では，主体性という言葉から思い浮かぶこと，イメージはどんなものかの結果は，全部で８つカテゴリーが抽出された。<自主性・自発性>類の描写を自由記述で 36 件であり，約 31%が「自主的に行動」や「自ら何かを行動にうつしたりする人」などの回答が得られた。＜判断力・自己判断＞で回答は 28 件であり，全人数の約 24%に占めた。回答の例としは「自分の判断で行動すること」と「自分で自分自身の行動を決めることができる」などであった。＜積極性＞を回答したのは 23 件で，約 20%であり，回答例は「自分から進んで物事に取り組む，積極的に行動する」と「積極的に物事に対して取り組んでいる」などであった。＜強い意志・信念＞のカテゴリーは 18 件で全部の 16%に占める，回答例は「周りに流されない，確固なる信念」や「プラスのイメージ，芯が強くブレない，軸がしっかりしている」などであった。＜行動力・活気＞のカテゴリーで，回答した件数は 17 件で全部の約 15%に占めた。回答例は「自分でやりたいことがしっかりする人，活き活きと活動している」「自分から進んで物事に取り組む，チャレンジ精神がある」などであった。＜自立・自律性＞のカテゴリーとは 11 件で約 10%を占めされ，回答例は「自立している，しっかりと責任を取れる人」「他人の意見に惑わされない，自我の確立」などであった。＜責任感＞で回答件数は 10 件で全体の 9%に占める，回答例は「自らの責任をしっかり果たしながら色々なことに取り組むこと」と「自分で考えて行動する，責任を持つ」などであった。＜リーダーシップ＞のカテゴリーは 10 件で全体の 9%に占めた，回答例は「リーダーや中心人物になるような人」「率先的」などであった。

(3) 仕事場面における主体性について

「仕事場面における主体性」部分では，主体性という言葉から思い浮かぶことまだイメージはどんなものかの結果は，全部で９つカテゴリーが結果として出た。

一番多くのはカテゴリー＜取り組む（仕事に関して理解と思考）＞類の描写を自由記述で回答した件数は 32 件であり，約 28%に占めた，回答例は「言われたことだけではなく自分でどうすれば良い方向へ事が進むか考えて行動できる人」や「仕事の貢献性とある領域を理解し，何が会社や公共の利益となるかを積極的に試行錯誤できる人」などであった。＜強い意志・信念＞で回答した件数は 30 件であり，約 26%に占めた。回答例としは「自分の信念を持って仕事をする人」と「他人に左右されず，自らの判断を確立できる人」などであった。＜自主性・自発性＞を回答したのは 27 件で，約 23%であり。回答例は「当事者意識をもって仕事に取り組める人」と「自分がやるべきことを自分で見つけて実行できる人」などであった。＜リーダーシップ・率先＞のは 24 件で，21%に占める，回答例は「周りにいい影響を与えられる人」や「他者をまきこんで仕事を推進できる人」などであった。＜行動力＞のカテゴリーで，回答した件数は 21 件で，約 18%に占めた。回答例は「行動力がある，挑戦することが好きな人」「積極的に行動する人」などであった。＜責任感＞のカテゴリーとは 12 件で約 10%を占めた。回答例として「最後まで責任を持って仕事をやり遂げる人」「自分の言葉に責任を持って働ける人」などであった。＜積極的・積極性＞のカテゴリーとは 12 件で，約 10%を占めされた。回答例として「積極的に仕事をしようとする」「積極的に活動できる人」などであった。カテゴリーは＜判断力・自己判断＞で回答件数は１０件で，全体の 9%に占める。回答例は「自分で判断できる，仕事内容を客観的に見ることができる」と「周りに流されず，自分で仕事について考えて判断を下さる人」などであった。カテゴリー＜主張性・発言力＞は 10 件で，全体の 9%に占めた。回答例は「会議などで積極的に発言，案を出し」「周りに流せれず自分の意見を述べることができる人」などであった。

5.　主体性の定義の改めと項目の選別

主体性の定義と構成を明らかにするため，質的調査の結果と先行研究のレビューを基づく，心理学専攻以外の大学院生５名とのディスカッション１回また心理学専攻の教員１と大学院生４名とのディスカッション１回を行った。

心理学専攻以外の大学院生５名（専攻は経営管理２名 AB，理工１名 C，政治経済１名 D，文学１名 E）とのディスカッションを 2019 年 9 月 5 日で行った。ディスカッションは約１時間を続けた。

最後には，主体性の質的研究と同じメンバー（心理学専攻の教員１と大学院生４名）より，心理学専攻以外の大学院生のディスカッションの結果と先行研究のレビューを参考して，項目選別のため，最後のディスカッションを行った。結果として以下の 6 概念に各概念 6 項目で全部 36 項目を選別しました。また，先行研究を参考して，項目の描写と表現を統一し，同じく「私は～」という格式を使い，また状況の説明文を入れて、Table5-1 のような「主体性尺度（仮）」の作成を試みた。

6.　考察

今回作成された「主体性尺度（仮）」には６つの概念「積極的行動」，「自己決定力」，「持続性」，「自己表現」，「取り組む力」，「責任感」の構成概念のもとに構成されている。質的検討に基づく項目作成であったが、実際には従来の研究でも概念の一部が検討されてきた。すなわち、「積極的行動」，「自己決定力」，「自己表現」３つの概念は浅海・野島（2001）の主体性尺度の３つの因子①積極的な自発的行動，②自己決定力，③自己表現と類似している。「責任感」と「持続性」は高井（1994）尺度実存的生き方態度インベントリー尺度の下位尺度主体性的側面[決断性・責任性・独自性]と伊藤・小玉(2005)の先行研究結果と類似している。「取り組む力」には堀内・岡田（2009）よりキャリア自律行動尺度の下位尺度「主体的仕事行動」と概念的な類似が認められた。今回の研究は質的研究にとどまり，量的研究で尺度の信頼性と妥当性の検証は行っておらず、主体性に関する研究の実践が今後課題である。

また，質的研究より仕事における主体性の構成を測定するためには，勤労者を対象にした先行研究を参考して，また仕事経験と部下管理経験ある人を実際ディスカッションに参加されたが，実際勤労者のデータを取っておらず今後の検討が必要である。今後の課題の一つは勤労者における主体性に対する認識の調査である。

引用文献

浅海健一郎　1997　子どもの主体性と適応感の関係に関する研究　日本人間性心理学会第16回大会発表論文集，84-85

浅海健一郎　1999　子どもの「主体性尺度」作成の試み　人間性心理学研究,17(2),154-163

浅海健一郎　2000　子どもの主体性と適応感の関係についての縦断的研究　日本人間性心理学会第19回大会発表論文集，120-121

浅海健一郎・野島一彦　2001　臨床心理学における「主体性」概念の捉え方に関する考察　九州大学心理学研究，2，53-58

文部科学省　2007　『学校教育法』

文部科学省　2019　『高大接続改革』

堀内泰利・岡田昌毅　2009　キャリア自律が組織コミットメントに与える影響　産業・組織心理学研究，23，1，15-28

井上史子・沖裕貴・林徳治　2005　中学校における自主性尺度項目の開発　教育情報研究21，3，13-20

伊藤正哉・小玉正博　2006　大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討　教育心理学研究，54，2，222-232

岩佐茂　1990　主体性論争の批判的検討　一橋大学研究年報，人文科学研究，28，177-227

経済産業省　2006　『社会人基礎力』

宮下一博・為川裕之　1991　青年の職業に対する価値意識と自我同一性　千葉大学教育学部研究紀要，千葉大学教育学部，39，1，111-116

嶺岸佑亮　2018　ヘーゲル主体性の哲学：〈自己であること〉の本質への問い　東北大学出版会

水本深喜・山根律子　2010　青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味：精神的自立・精神的適応との関連性から　発達心理学研究，21，3，254-265

物書堂　2008　『大辞林　第三版』

中間玲子　2013　自尊感情と心理的健康との関連再考：「恩恵享受的自己感」の概念提起　教育心理学研究，61，4，374-386

日本経済団体連合会　2018　『新卒採用に関するアンケート調査結果』

下山晴彦　1986　大学生の職業未決定の研究　教育心理学研究34，1，20-30

清水 美奈　石津 憲一郎　2018修正版主張性の4要件尺度の改編　教育実践研究 ： 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要（13)，23-30，2018-12

田畑久江　2016　「子どもの主体性」の概念分析　日本小児看護学会誌，25，3，47-54

高井範子 1999 対人関係性の視点による生き方態度の発達的研究　教育心理学研究，47，317-327

髙濱怜美・沢崎達夫　2013　非主張性尺度と青年用アサーション権尺度の作成　目白大学心理学研究，9，65-75
高木源・若島孔文　2018　心理変数による職場適応の予測　東北大学大学院教育学研究科研究年報　66，2
渡部麻美　2008 4 要件理論に基づく主張性と社会的情報処理および精神的適応との関連　パーソナリティ研究，　16，2，185-197
渡部麻美　2010　高校生の主張性の４要件と友人関係における行動および適応との関連　心理学研究　81，1，56-62
山田裕子　2011　大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連　青年心理学研究 23，1，1-18
芳野郁朗　2002　興味モデル構成の試み　感情心理学研究 9，2，98-111